様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６４３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１２６２

研究課題名（和文）「食育・食農教育の教育的効果の検証と教育モデルの実証的研究」

研究課題名（英文）An Empirical Study on the Educational Effects of Food and Agriculture Education and Educational model.

研究代表者
野田　知子（NODA, Tomoko）

帝京大学・教育学部・教授

研究者番号：２０５２１５７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,200,000円、（間接経費）　960,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、食育・食農教育の教育的効果の検証と教育モデルについて実証的に研究することである。研究対象を全市の小学校で農業体験学習を授業で取り組んでいる、喜多方市小学校農業科と、美唄市農業体験学習とした。二つの市とも、「市の基幹産業は農業である」という認識を基礎にして教育行政をおこなっている。研究方法は、授業参観、聞き取り調査、作文分析、アンケート調査等である。研究の結果、農業体験学習の効果、支援員の役割、教員の認識と課題、地域との連携、行政の取り組み、そして、二つの市に共通する特徴などが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to analyze the educational effect of food and agriculture education and the educational model. We proceeded with our research on the "Department of Agriculture" at Kitakata elementary school and the "agricultural experience learning" at Bibai elementary school. They conduct educational administrations based on the concept of "Basic industry of our city is agriculture". In this study, classroom visitations, hearing investigations, essay analyses and questionnaire surveys were conducted. It was clarified that the effect of agricultural experience learning, the roles of support assistants, awareness of and future issues with "Department of Agriculture" among teachers, cooperation with local communities, efforts made by the government, common features found in the efforts made by those two cities.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：農業科　総合的な学習の時間　農業体験　食農教育　地域との連携　支援員

１．研究開始当初の背景

日本の普通教育の中には、教科としての「農業科」のような、農業に関する学びを直接的に学ぶ教科はない。しかし、平成 12 年 4 月から導入された「総合的な学習の時間」に農業体験学習をおこなう学校も増えてきた。しかし、時間がとれない、農地がない、指導方法がわからない等の多くの課題を抱えている。

そのような中、 喜多方市は、平成 18 年 11 月 26 日、国の構造改革特別区域として内閣総理大臣より喜多方市小学校農業教育特区の認定を受け，小学校に全国初の教科としての「喜多方市小学校農業科」を設置し、平成 19 年 4 月 1 日から、準備の整った小学校から順次「農業科」の授業が開始され、開始後５年目の平成 23 年度で、全小学校で「農業科」の授業を行えるようになった。喜多方市教育委員会主催のシンポジウムや、児童の作文コンクールを行い「作品集」を毎年発行する等の取り組みをしてきた。「喜多方市小学校農業科」は教育のみならず農業関係者から注目をあびる取り組みとなっている。しかし、この「農業科」は、平成 21 年度より「総合的な学習の時間」に組み入れられることとなり、教科としての「農業科」は廃止になった。ただし、「農業科」という農業科設置の意義を今後も尊重する意味から「喜多方市小学校農業科」の名称は継続使用されている。

また、北海道美唄市は、「グリーン・ルネサンス推進事業」の中心的取り組みのひとつとして、平成 22 年度から「地域に根ざし、暮らしに学ぶ（生活の場）」に基礎をおく教育プログラムによる農業の実体験活動を小中学校で行っている。実施に先立ち、教育委員会は、喜多方市の取り組みに学び、学校現場・教職員を支え、支援する取り組みを始めた。H22 年度から７小学校のうち６小学校で稲作体験を中心に取り組み始め、H23 年度から全小学校（統廃合で６校）で取り組みが始まった。

「喜多方市小学校農業科」、「美唄市農業体験学習」ともに、外部からの調査・研究はあまり行われてない。また、行政単位での食農教育・農業体験学習の取り組みについての検証はされていないのが現状である。

２．研究の目的

昨今「食育基本法」制定などの「食」に対する意識や「総合的な学習の時間」や中学校技術科「生物育成」の必修化など「農」に対する意識といった「食育・食農教育」に対する、教育的な効果及びその影響について社会的な評価が高まりつつある。しかし、「食育・食農教育」の教育的効果が、生徒達の食生活及び意識さらには生活意識全般にどのように影響を及ぼしうるのかといった体系的な調査研究は少ない。

本研究では、「食育・食農教育」の教育的効果の検証とその教育効果モデルについて、地域社会との関わりの中から、実証的に明らかにする。

３．研究の方法

本研究課題を明らかにするため、「食育・食農教育」を行っている「喜多方市小学校農業科」と、北海道「美唄市小学校農業体験学習」の事例をまとめ、個々の地域での実践方法や推進体制の工夫、成果や課題などについて、学校関係者からの聴き取り調査、授業参観などを通して明らかにして行く。また、あわせて個々の地域での児童・生徒へのアンケート調査を行い、その教育的効果や生活意識などについて明らかにしていく。これらの調査分析を通じて、「食育・食農教育」の教育的効果を検証し、その教育的意義を明らかにするとともに、そのために推進体制のモデルや教育カリキュラム上での位置づけなどについて、明

らかにする。また、児童・生徒以外にも、教員・地域社会や農業支援員たちへのアンケート調査、聞き取り調査などを通じて、「食育・食農教育」の在り方について構造的に明らかにしていく。

４．研究成果

本研究によって明らかにした成果は下記のとおりである。

(1)　小・中学生アンケート調査結果から、農業体験学習は、「楽しかった経験」よりもむしろ「辛かった体験だから印象に残る」すなわち、「難しかった経験」や「手間をかけた体験」といった子どもたちの関与を作物の栽培過程に組み込むことで、農業体験の深まりに繋がることも明らかになった。そして、①持続性・一貫性のあるもの、②集団の作業があるもの、③土を体感できるもの、④収穫後に食べることができるもの、などに印象が残り、現在の食意識等に息づく要因となることが推察された。

(2) 喜多方市小学校農業科「作品集」を分析した結果、次の事が明らかになった。

①作文には「支援員」が多く登場し、支援員に多くを教えてもらっている。

②作文には「作業は大変」と多くの児童が書いているが、それに続けて「喜びがある」「喜ばれる」「野菜に感謝」「農業をする人に感謝」などの言葉が続き、「大変さ」「厳しさ」「手をかける」農作業が多くの学びをもたらしていることが明らかになった。

(3)農作物の生長に継続的に関わることで、「食べものは命である」という認識が形成されている。「食べものが命である」という食意識の土台形成に「一連した本格的農業活動」が有効であることが明らかになった。

(4)支援員のはたしている役割が、支援員を対象にしたアンケート調査結果や児童の作文からから次の事が明らかになった。

①　支援員の活動は、「農業科」の授業を行うために多くの貢献をしている。

②　支援員は、単に農作業の仕方を教えるだけではなく、農作業の持つ意味、農業の大切さ、人間の知恵、植物のすばらしさ等も教えている。

③　支援員はその活動の姿や話などから、生き方・労働に対する考え方など、児童の人格形成までも影響を与えている可能性がある。

④　地域の人々が、児童達の実習指導をすることで、開かれた学校づくりや地域の活性化にもつながっている。

「種まきから収穫・調理・食べる」までの一連の作業を通して、手をかけて栽培する「大変さ」の体験を通して、喜びや農業をする人へ感謝を感じ、農業への理解が深まる学びのある農業体験が出来るのも、支援員のサポートがあるから出来ると思われる。

また、⑤支援員制度は、高齢者がたよりになっている、⑥支援員にとって、児童との活動が生きがいになっていることもわかった。

(5)教員になるために学ぶ「教育職員免許法施行規則」の「教科の指導法」の中に、「農業科」はない。「農業科」の授業を担当した喜多方市教員アンケートから次の事が明らかになった。

①農業科の授業を担当して「大変だった」と答えた教員が半数を超えた。しかし、半数近くが「充実していた」と答えている。

②「農業科」は「必要である」と 62.7%の教員が答えている。必要な理由は「食べ物がどのように作られているかを実体験して知ることで、食の大切さがわかり、感謝の気持ちが生まれる」という答えが一番多かった。

③農業体験学習の価値について 89%の教員が「栽培して収穫した物を食べる事に教育的価値がある」と考えている。

④「栽培結果より栽培プロセスが大切である」と 70%の教員が答えている。

⑤教員も「農業科」の授業を通して、栽培技術、農業の科学性などを新たに学び、作物・食べ物を作る苦労と喜びを感じている。
(6)農業科の課題については次のような事が述べられていた。
①授業のねらいを明らかにする。
②農業科・農業体験学習と教科学習の関連を明らかにする。
③体験が多くを占め、追求的活動になりにくい。調べたり、探求する楽しさが学べる授業が必要である。
④支援員に頼り過ぎになっている。支援員との連絡を密にし、支援員との分担をはっきりさせる必要がある。
（７）喜多方市立小学校「農業科」と、美唄市「グリーンルネッサンス推進事業」の「農業体験学習」が、多くの一般的な「農業体験」と異なる特徴は次のような点である。
①　行政と教職員が「喜多方市の子ども」「美唄市の子ども」を育てるための教育をする、という認識を持っている。
②「地域の基幹産業は農業である」という認識を教育の土台としている。
③　行政が施策として明確に位置づけ、条件整備をしている。
④　学校のカリキュラムで、農業科、農業体験学習の時間が確保されている。
⑤　実習の支援のために、農業者など地域の人々の協力体制ができている。

以上、喜多方市と美唄市は、気候、風土、農業環境、農業人口の年齢構成も異なる。共通することは、「基幹産業は農業である」という認識からの取り組みで、教育に熱い思いを持つ人が多く、それらの人々の思いを活かし、学校を支えるシステムを構築して、地域で小中学校の農業体験を支えていることである。その方法は、それぞれの地域の条件によって取り組み方が工夫されていた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）
①　野田知子「教育農場における食の生産についての学びの意義」『平成 25 年度帝京大学教育学部紀要』（査読有）2014 年，207-216 頁。
②　阿部英之助「農業体験学習の深まりとその持続性」－福島県喜多方市学校ｱﾝｹｰﾄ結果から－」『和歌山大学教育学部教育実践総合ｾﾝﾀｰ紀要』（査読無）23 号,2013 年，185-189 頁。
③　森山賢一「高等学校新学習指導要領と新たな農業教育の展開」『日本農業教育学会誌』（査読有）43(2)，2012 年，53-56 頁。

〔学会発表〕（計　７　件）
①　阿部英之助，野田知子，森山賢一「教員ｱﾝｹｰﾄに見る農業体験学習の現状と課題－福島県喜多方市「農業科」の事例より－」教育実践学会 21 回大会, 2013 年 12 月 1 日，玉川大学（東京都）
②　野田知子，森山賢一，阿部英之助「喜多方市小学校「農業科」の成果と課題－「支援員」アンケート結果より－」第 71 回日本農業教育学会講演会．2013 年 9 月 1 日，秋田市カレッジプラザ，日本農業教育学会誌第 44 巻　別号 pp73-76。
③　野田知子，阿部英之助，森山賢一「小学校「農業科」における農業体験が子どもの食意識に与える影響－喜多方市立小学校農業科作文コンクール『作品集』分析－」教育実践学会 21 回大会．2012 年 12 月 1 日．常磐大学（水戸市）。

④　野田知子，阿部英之助，森山賢一「農業体験におけるｻﾎﾟｰﾄ役（農業支援員）が子どもに及ぼす教育的影響－喜多方市小学生の食農体験活動アンケート結果より－」第 70 回日本農業教育学会講演会，2012 年 9 月 17

日，愛知教育大学（愛知県）日本農業教育学会誌　第43巻別号　pp.73-75。

⑤　阿部英之助，野田知子，森山賢一「農業体験の深まりと子どもの意識に及ぼす影響～喜多方市小学生の食農体験活動アンケート結果より～」第70回　日本農業教育学会講演会,2012年9月17日,愛知教育大学(愛知県)，日本農業教育学会誌　第43巻　別号 pp69-72。

⑥　野田知子，阿部英之助，森山賢一「小学校「農業科」における農業体験が子どもの意識に与える影響（１）　－喜多方市立小学校農業科作文コンクール『作品集』分析－」第69回日本農業教育学会講演会，2011年9月11日，島根大学（松江市），日本農業教育学会誌　第42巻別号 pp.51-54.

⑦　阿部英之助，野田知子，森山賢一「小学校『農業科』における農業体験が子どもの意識に及ぼす影響②～中学生の食農体験活動ｱﾝｹｰﾄ結果より～」第69回日本農業教育学会講演会，2011年9月11日，
島根大学（松江市），日本農業教育学会誌第42巻別号 pp55-87

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
野田　知子（NODA　Tomoko　）
帝京大学・教育学部・教授
研究者番号：20521579

(2)研究分担者
森山 賢一（MORIYAMA Ken-ichi）
玉川大学・教育学部・教授
研究者番号： 90337288

阿部 英之助（ABE Einosuke）
和歌山大学・教育学部・特任准教授
研究者番号：10408982

(3)連携研究者　　なし